

人物圖會

全

特別
14
696
9



特
696
9

上海圖書館

小學
玉泉山

○車中順益齋

右延壽字秋甫
別号古多園
又蓬通公天
術又蓬通公天
後又見何下
無加菴釋白瑛居士

○永成周二

右他号別号一桂堂
又龍風園
年器之三考又之一壽八
古書古物を好く日々
廣應二年十月五日
永成周二



此圖は繪師の一作也



○小舟九度

右廣海字好古別号舟中
又東杉合孫女
七舟佛の右

○松尾屋新兵衛

如右仁三
号一十
号一十

○高橋

右高橋
仙果

何事ぞとてしるべきか
 東都の久松とて
 衣冠の柳を著る
 法華の作
 世の色は
 不可得
 戊辰二月九日
 高木山房義成
 江戸山守
 娘
 又



飛

古連
 年
 天
 申

申
 申
 申

右八天狗

再前

年
 長
 大
 小
 柳
 尾
 尾

新
 申
 申
 申

新
 申
 申
 申

申
 申
 申
 申
 申
 申

申
 申
 申
 申
 申
 申

○不慮東翰南文

萬延元年庚申八月十八日没八十六歳

南寺所淨土宗梅香院三葬

不殊院露得信屋

梅香院住持岩ツツル

不慮四十年前文字

露得信屋

得信二字八姓年

因田新川先生名ツツル

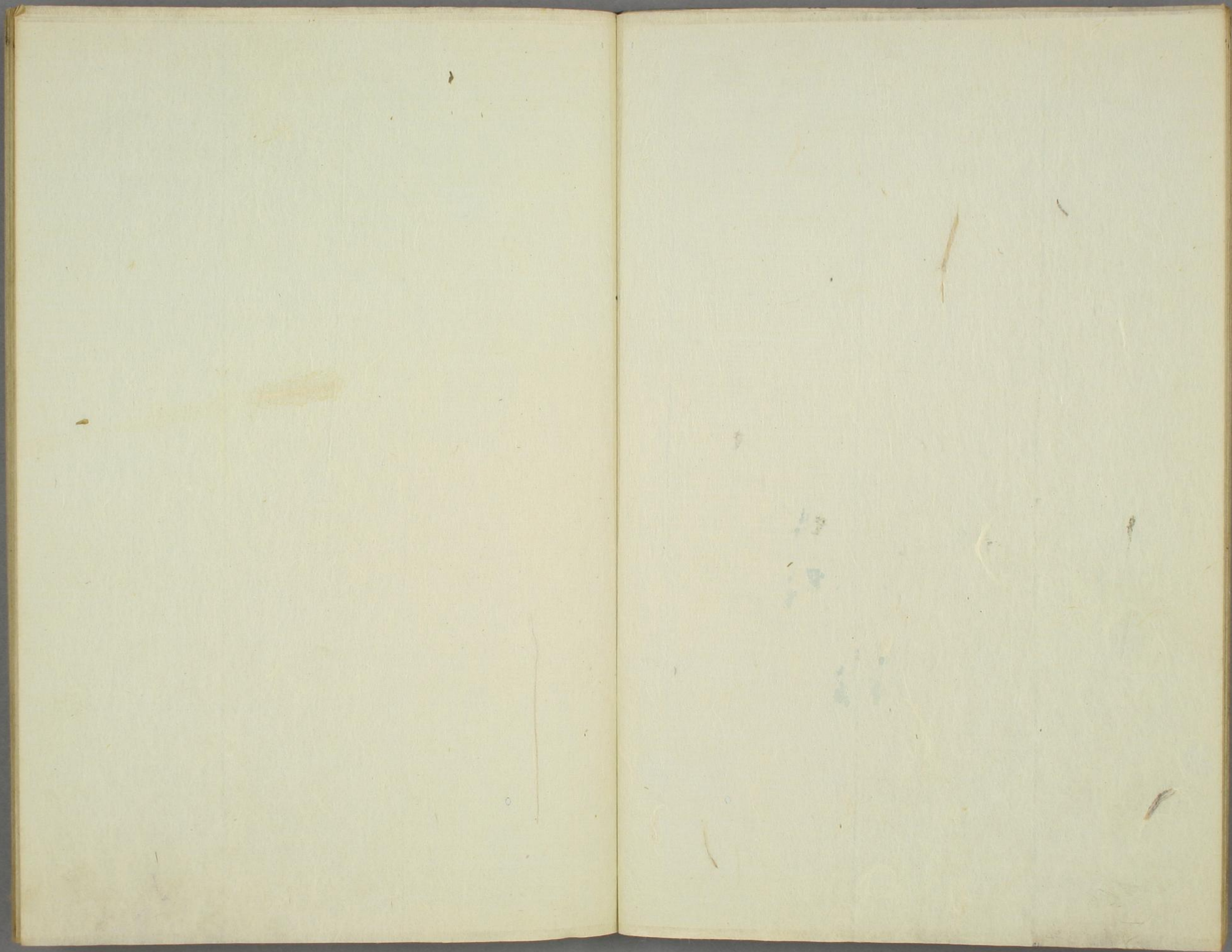
所ナリト云



養子某が語曰延年八作部老妻近行方
のこありき方ハ世より八月三日一辰渡麻

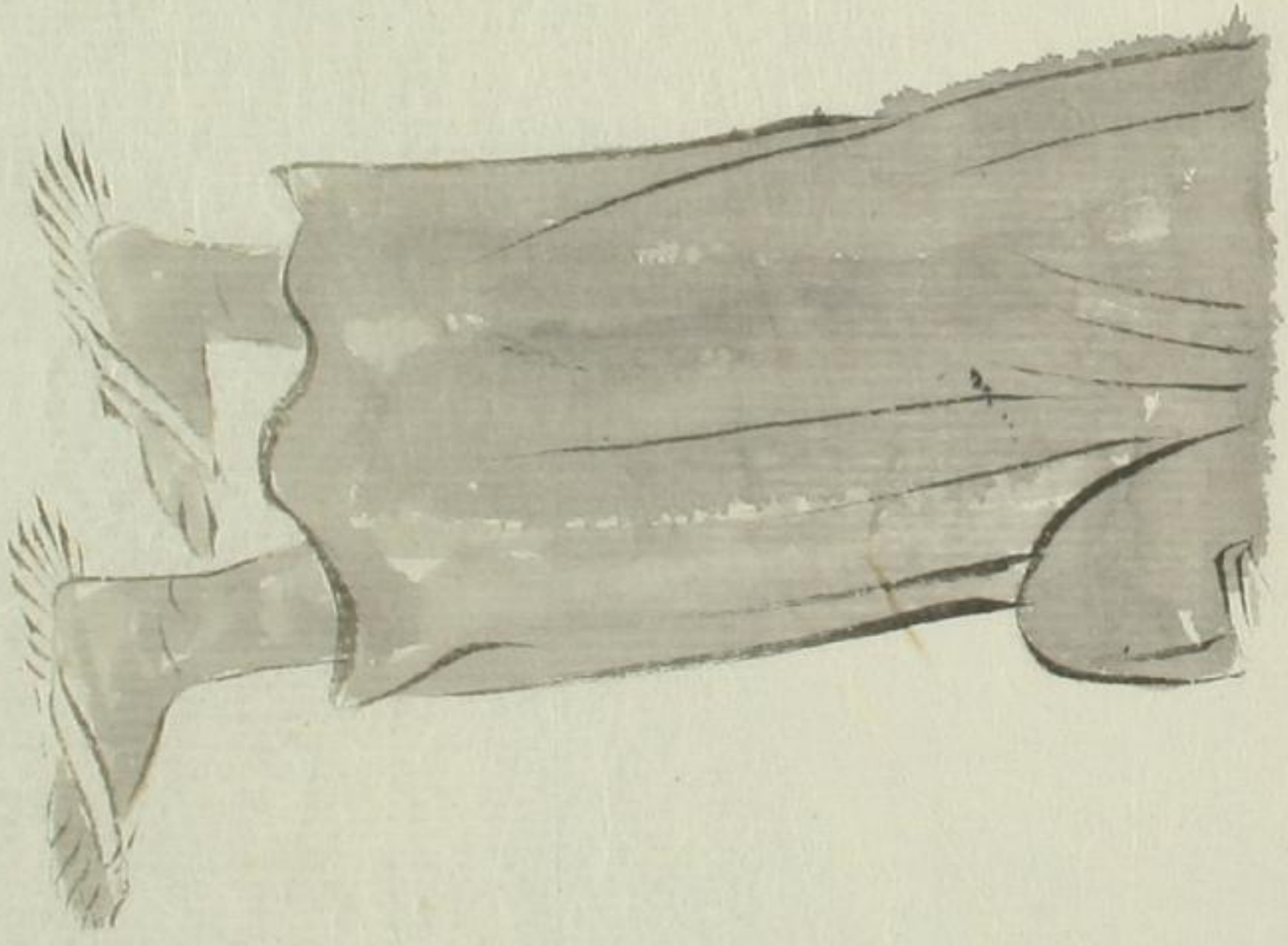
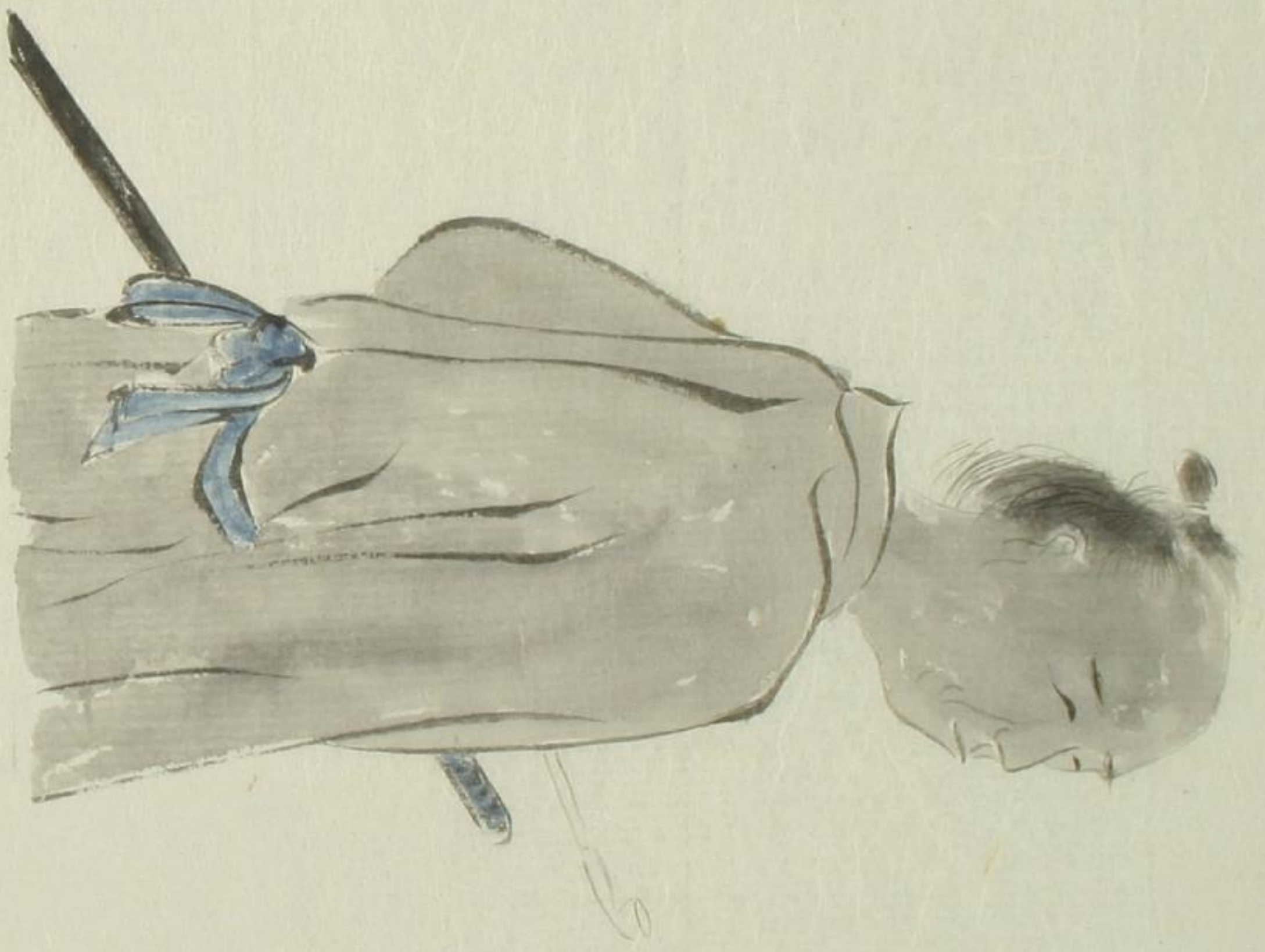
老水河溜 雅景 日ありし
春の 日ありし
松竹 梅 重幸 那老 南 物 海 天 心 元 也





○吾の邦中より文化のこゝろは伏見所なる花屋所なり
箱谷助九郎といふ者頗る新しき所といふは世に知らず
異つた人なり所々をめぐりて人々を驚かすは其の
ありしに似たりといふは其の流傳也其の其の肖像
さへ山の山本梅逸先生に定めて我々も画するに
し成らぬといふ。神谷克福先生も其の肖像を
なすべしといふ者
山本梅逸はうき世にうき者といふは世に知らず
とて其所を定めてしるすは其の定むるなり

か
里の
女
か
き
て
な
ら
ず
か
き
て
な
ら
ず
か
き
て
な
ら
ず



か
ま
の
せ
ぬ
あ
ま
の
う
ら
や
ま
の
こ
い
ち

備々鬘髮獨浴身
竹杖提携笑貌類
好使村臺多學語
柙城南陌一時珍

此圖はあつ
雑書の中よりとるものなり
写し置かばおもむきの後始り
たう



○御墨所善坊

下印を右村の佐左の辨證は此方の本と尋ねてしるべき
私初年の春書屋出く山忠行なりといひの別く若手
其はハエキソといひ一日夕ワケを言ふは
中村の村の善坊の御墨所
持て者生也替りて
久昌を存り
如賀
の國
大家
へ生
如賀の國より久昌を存りてあり右裏の七持行と書く左



○文化年の本の...
 申道の本の...
 精霊祭其路...
 大之...
 獨者



木村屋於金之像



○三度堂の於春

宝曆の頃三蔵御蔵の茶
水溜りし金銀の舟の舟入
のまゝ茶室の中は煙
女乞食ありしは三度堂を
ふらふ由り三度堂をよびし
そと名のおもむく唐井側は
あつたりの那ー近きもの
屋敷の家内の子供もあつた
唐の人の人もあつたや
いふくちきちきとけつあやせ
あり常々大頂の親世音を信
日参すまふ死する日参すまふや



○荒波の心

宝曆の頃所々を歩
あひまゝ旅人の場を歩
あゝとあひまゝ
をきかぬまゝは三度堂を
ゆきせし神すまゝの
首を仕入る通帳を
くまひまゝにまゝ
舟中舟をすまゝ
まゝの通帳を
持ぬる振らすも
輪とくまゝ
よつ下りまゝ
くまゝのまゝ
指すのまゝ
あゝまゝ



○年妻はひ江之兵衛
 明和の項唐小路彼岸
 八東懸うさぬの
 品玉式ハ金輪切をて
 辨説はあはれらへり
 言ひて諸人は真とるこ
 一むろの先あるは
 形も形をておつは男
 是ハ大坂より来りし
 今時の新妻もつてハ
 甚あつていひよるは
 其項唐ハ評判よる



上にては松竹の
 玉子も田舎あつた
 ちいさなちいさな
 ちいさなちいさな

○木さく坊主
 明和より安永の
 項唐もつてつり
 子名ハ年妻
 きて武高家の
 子ありしハ
 菊つりて女
 まよひてさぬ
 かなひぬさぬ
 まつりてはは
 ろつて侍より
 海瑠理と好む
 あつて門は
 蓬左狂者傳
 を名氏者ハ
 身もあつた
 香積院の山
 市中の人



あつて門は
 蓬左狂者傳
 を名氏者ハ
 身もあつた
 香積院の山
 市中の人

○婦納焼和七

寶曆明和

の項大頂

門新上

辻店と

お

色紙焼と

高小宅ハ

善島寺門

おとて授名

号以りの間

誰とせせ

男根大あり由

いひゆして

程とらるる



大評判が馬の塔も地り又も
 十五夜お月お夜もあやもあやも
 の事お別

婦納焼和七の傳玉鬼傳(安)と再を致

以和七といふ者候し女もあはれと世帯一統の評判をありし由
 なりけぬと男やと前評判の世帯にゆけり世帯百花も
 者との女も代傳といふゆゑもお評判は傳和七と一夜を
 くれとてお評判の女かこころは係アリ人母も世帯評判
 ありては思ひぬとて男も必なるもその世帯のむとて一夜和七
 同夜もてお評判の女や和七を名とてゆりて後評判もあはれハ
 和七世帯の評判の如くの大評判やとてハ女こころも支給とて
 評判の女といひしは女は定て思ひぬとて
 孝孺天白まの再ありとてやとてん

○楽作

前津の事... 乃て大光院...
 明王を信仰せし... 大光院門前...
 ち... 何...
 ... 住来の人の教を...
 ... 命を全す...
 ... 月代...
 ... 文化の...
 ... 前津村...
 ... 後死



○首振

常々極楽寺門前...
 塩カシ... 浄瑠璃...
 ... 住来の人の...
 ... 侍...
 ... 故...
 ... 水...
 ... 首...
 ... 文化...
 ... 中...
 ... 首...



○大山春彦清

かきくちとほせしとては海ゆよむ

生所大山れりしつとて
丁保三亭甲二日守有れ
喜成錦不也世久人代
いりしあちあちうらわ
廿一人あし中

如る振る生用
正字の振る



○すなわき

天代の中いしとては
こは後二あれせしとては
あしすのまこのせいのあち
よひしとて



○泥塑八

東小屋の土屋あり昔は江戸の
わき木と云ふ所の曲を
てきまきと云ふ
家と云ふ所

木と云
曲と云
く
こ
改

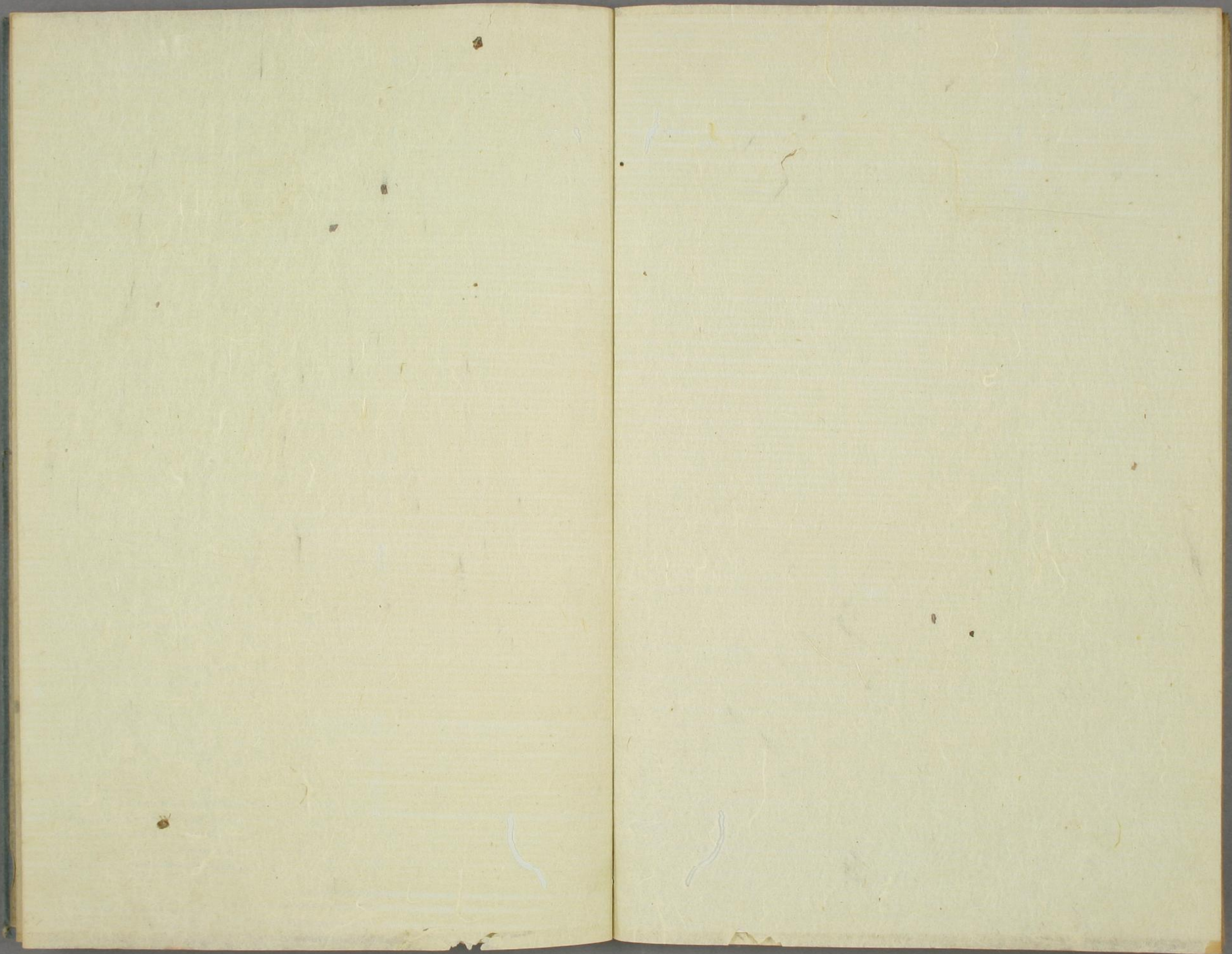


十

○庚申ノ龜

春の并部 幸心村 白蛇のふり
てきまきと云ふ所の曲を
てきまきと云ふ
家と云ふ所
てきまきと云ふ
家と云ふ所
てきまきと云ふ
家と云ふ所





以下全て

白紙

